

研究テーマ

「差別や偏見をもたない児童を育成するための実践の工夫」

—自分の大切さとともに、みんなを大切に—

1 研究の実践

(1) 主題設定の理由

本校の児童は、元気で明るく素直である。しかし、些細なことから友達同士でのトラブルや軽はずみな行動などが見られることがある。これらは、学級や友達同士の人間関係の希薄化、家庭での道徳性の低下などの原因が考えられる。

まず、学校教育においては人権の知識理解をいっそう深めると共に、児童一人一人が人権感覚を十分に身に付けるための指導をいっそう充実することが必要である。

さらに、人権教育が目指すものを明確にし、教職員がこれを十分に理解して計画的に進めることが重要である。

そこで、本校では自他を大切にし、差別や偏見をもたない児童の育成を研究主題とした。

(2) 研究のねらい

学級を基本として、学校教育全体で取り組むことを重要と考える。そして、自分を大切にす人権感覚を育成することにより、自他を認め合う力を付ける支援をし、人権教育の啓発・差別や偏見のない児童を育成することである。

学校の教職員の研修を行うことにより、児童の一人一人についての理解を深めることとともに、人権についての理解と啓発を促し、学校全体で児童の人権教育にあたる。

(3) 実践例

ア 学級活動の指導例から

4年生では、人権を尊重する教育として具体的に友達や自分の良いところをワークシートに書いたり、学級で話し合ったりしていじめや平等・偏見のない友達の接し方をスキルとして学習を続けてきた。

例えば、「こんな時どうする」「いろんな気持ち」などの題材を用意して、みんなの感情・気持ちを話し合いソーシャルスキル、「ごめんねチャンス」では、「ごめんね」「ありがとう」と言う機会を見逃さず、きちんと言うことができたかどうか一週間記録をとり続けた。その結果、「ごめんね」とう機会があまりなく、自分で言うことなくマークに色を塗っている児童が多かった。「ごめんねビンゴ」で相手が考える、ごめんねチャンスと謝るスキルを学習してきた。今後も対人関係作りに生かせるように継続的に振り返りをしていくという「ごめんね」と言う実践力につながっていくものである。自分をよく知ることで、友達に対しての人権や優しさがわかり合えるのである。

イ 人権ビデオ視聴から

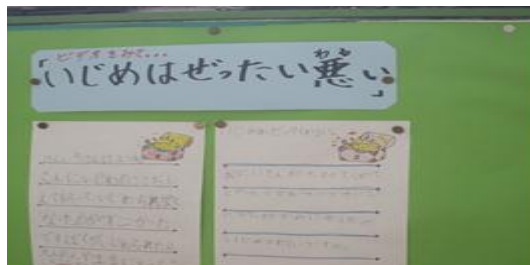
児童は、1学期に人権ビデオを視聴した。特にいじめに関する内容のものであった。題名は「知らんぷり」と「いじめはぜったい悪い」の2本を視聴した。耳からの音声理解が苦手な児童には、視覚的に理解することができたと思う。アニメーションのビデオであり自分の身近な出来事のようにとらえることができた。児童は、どの学級でも静かに真剣に視聴できたようだ。それだけみんなの周りに同じ事があるのだと思うと、共感できたのだと思う。児童はみな「いじめ」は悪いことだという内容の感想を持ち、人権に対する意識が高まった。

ある2年生の児童は、「自分がいじめられたら先生や、大人の人に言おうと思います。」という感想を書いた。自分だけで閉じこもるのではなく、多くの人の意見や話を聞こうというように気づいてきている。

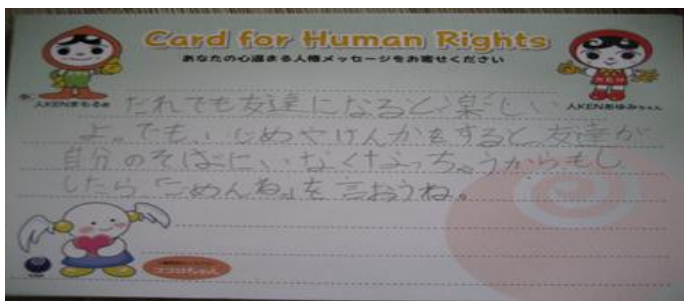
「高学年のビデオ視聴の様子」



人権コーナー・掲示板—環境面で
☆ 環境面で・・・感想文の掲示



(4) 人権メッセージへの応募



人権メッセージのカードには、児童の素直な考えを書く児童が多かった。そして、いじめやけんかは絶対やらないほうが良いという言葉が書かれていた。

2 研究の成果と今後の課題

人権教育についての実践から、各学級の活動や道徳の題材などを通して、「友達とどうふれあうか、自分はどうしたらいいか。」等の学習を通して自分と友達と深く考えることを多く取り上げて指導してきた。その結果、自分の事をよく知った上で、友達に対しても言われたら嫌なことやされたら嫌なことを多くの児童が自覚してきた。人権感覚の成長が見られるようになってきている。

さらに、人権ビデオの視聴を通して、視覚的にいじめや偏見を持つことはとてもいけない事だということを理解できたと思う。感想でも、いじめはいけない事、人を傷つけることは悪い事。というように強く思うようになってきたように思う。そうした考えが身につく行動にもだんだんと表れてきている。

こうした人権教育は、学校全体や全児童を対象として生活の中で行うものであると思う。こうした感覚を持つことで人間関係がより良くなっていくものである。これからも継続的に振り返りと指導をしていくとともに、学校だけでなく地域や保護者にも協力してもらい、人権教育の理解と啓発を広めていきたい。